連雀学園

連雀

様式6

平成２８年度　連雀学園の評価・検証　結果報告

検証項目	（１）　人間力・社会力の育成 ○他者との適切な関係を構築する力の育成　○他者と共に自己実現を図っていく力の育成　○地域や社会等へ貢献する力の育成　○その他
目標	・小・中の発達段階に応じて地域の人財や教育力を活用した教育活動の充実を図る。
取組	・各小学校の支援組織を活用して、教科の授業やキャリア・アントレプレナーシップ教育の充実を行うとともに、組織を生かした中学校の教育活動の支援を行う。

成果	課題と改善方策
・一中では、夢育・みな☆サポの定期考査前の自習教室が定着し、地域人財による支援の取り組みが進んだ。また、CSサポート部の支援を得た中1の職業人に話を聞く会も実施できた。 ・各小学校でも、アントレプレナーシップ教育の年間指導計画及び学年の発達段階に応じて、問題意識を高め、活動の見通しをもって取り組み、指導の充実が図られた。 ・特に、六小では10月の学校公開授業が保護者への理解を広めるよい機会となった。また、南浦小ではJAとの連携や第三者評価を充実させることができた。 ・四小の夢育支援ネットワークは今までの実績に加え、教科学習等においてボランティアを活用した新しい取組も行われ、効果を上げている。 ・心のふるさとネットワークは組織編成の在り方を変革し、地域の方により参加しやすいものとする時期を迎えている。 ・今年度初めて事務局、教員担当者、サポーターによる、みな☆サポ連絡会を実施し、学習支援を進めてきた。	・キャリア・アントレプレナーシップ教育は、新しい教育課程に伴い、カリキュラムの見直しが必至である。カリキュラムマネージメントの考え方を取り入れたキャリア・アントレプレナーシップ教育の在り方を児童・生徒や地域の実態を踏まえた目標、内容に即して作成すべきであろう。その準備を進めていく。 ・児童にとってキャリア・アントレプレナーシップ教育の意図がまだ十分に伝わっていない面があるので、目標を明確にし発達段階に応じた具体的な活動を通して実践し、理解を深めていく。 ・また、保護者への周知と理解をさらに広報活動による周知が必要である。公開授業や学園・学校・学級便り等での分かりやすい広報に努める。 ・今後も、各校の課題を解決し、児童・生徒の教育活動に積極的に関わる支援組織を創造していく。さらに、CS委員会の協力を得て、各小学校支援組織の合同会議を計画し、中学校のキャリア・アントレプレナーシップ教育の支援を組織的に行うようにする。

検証項目	（２）　学校運営について ○小・中一貫教育校の学園組織の活性化　○小・中一貫教育校の教員間、学校間の交流の円滑化　○小・中一貫教育校の校務、会議の効率化　○その他
目標	・学園の組織を活性化させ、各学校の組織との連携のもとに、組織的な課題解決力を高める。
取組	・学園の推進委員会を中心とした組織により、教育活動や研究活動の充実を図るとともに、校務支援のシステムを活用した効率的な学園・学校運営を行う。

成果	課題と改善方策
・共有フォルダ、メール、回覧、掲示板などは年間を通して有効に活用されており、情報の発信者としての意識も高い。反面紙ベースの必要性も課題となってきている。 ・回覧板の活用が図られ、学園研究では一体感をもった取組ができ、会議が効率的に行われるようになってきている。今後も有効な活用の在り方を考え、実践し、効率的な校務運営を行う。 ・一中では、企画調整委員会、運営委員会は引き続き毎週定例的に実施し、情報共有を進めている。各主任を中心に組織間の連携を図り、組織的対応を行うことができた。 ・六小、南浦小では、経営会議及び校務支援会議による改善が図られ、主任・主幹・副校長が円滑に動く組織となってきている。	・校務支援については、整理・統合、ICT化、役割と責任を徹底し、児童・生徒と向き合う時間の確保を目指していく。 ・また、全員が情報の発信者となるなど、回覧板やメールでの情報のやり取りは日常化した。ペーパーレスを一層進めていく。 ・ICTの苦手な一部教員が十分活用できておらず、今後意識の向上を図る必要があり、手立てを工夫していく。 ・分掌組織を見直すことも視野に、さらに校務改善を推進する。

検証項目	（３）　小・中一貫教育校としての教育活動 ○小・中学校間相互乗り入れ授業　○小学校相互、小・中学校間の児童・生徒の交流活動　○小・中学校教員の合同授業研究等の学園研究会 ○キャリア教育及びそれに基づく小・中の系統性と連続性を明確にした授業実践、授業改善の状況　○その他
目標	・連雀学園の実施方策に基づき、小・中一貫の教育活動の充実を目指す。
取組	・学園研究を充実させて、小・中一貫校としてのカリキュラムの開発と新しい教育課題を視野に置いた授業改善を行う。　・ 「連雀『学び』のスタンダード（わが家のスタンダード」）などをもとに学園・学校としての家庭学習への支援のありかたを各家庭に示す。

成果	課題と改善方策
・問題解決的な学習や知的コミュニケーションを中心とした研究に教員の意識が高まっている。研究対象の教科についての教材研究が進むと同時に、主体的・協働的な学習の視点から授業改善が図られ、小グループ討議を取り入れた研究協議会も活性化している ・AL第一分科会では社会科、理科、生活科についての教材研究が進むと同時に、主体的・協働的な学習の視点から授業改善が図られた。 ・AL第二分科会では、体育科の研究授業を通して、主体的・協働的な学習についての理解が深まってきている。 ・特別の教科　道徳分科会では、「考える　議論する道徳」授業にする手だてについて明らかになってきている。それぞれに成果が表れており、学園研究としては順調に進んでいる。 ・児童会・生徒会による「子ども熟議」を経て、連雀学園SNSルールを決めることができたことで、児童会・生徒会役員は達成感を得ることができた。 ・また各学校で、生活指導部と連携して、周知も進められている。自分たちで作ったルールという意識をさらに高め、広めていく活動が必要である ・.3学期には使用済みの切手を集めて寄付をする取り組みを計画している。	・学園研究第2ステージ1年目として、まずは順調な滑り出しといってよい。課題としては、各分科会の成果をどのように共有していくか、である。研究を一つのものにする「知的コミュニケーション」を中心に据えた研究からぶれないようにするためにも必要である。 ・来年度は共有する時間の設定や研究協議会の持ち方の工夫など取り入れ、学園研究としてのまとまりを意識するとともに、学園全体の教員が当事者意識をもって参加し、日々の授業改善に活かせる研究会とする。 ・児童会・生徒会交流については、小学生の活躍の場をどのように設定していくかを検討し改善する。

検証項目		（４）　児童・生徒の学力・健全育成 ○　児童・生徒の学習意欲　　○　各学年での児童・生徒の学習内容の定着状況（習得、活用、探究） ○　小学校と中学校の評価の一貫性　　○　不登校、学校不適応等に関わる児童・生徒の指導・支援
目標	学力	・一人一人の児童・生徒がわかる楽しさ、できる楽しさ、かかわる楽しさを実感できる授業づくりを推進する。
	健全	・あたたかい人間関係とよりよい生活習慣、運動を楽しむ意欲を育てる。
取組	学力	・問題解決学習、知的コミュニケーションなどをキーワードに授業改善を行い、学力の向上を目指す。 ・「連雀『学び』のスタンダード（わが家のスタンダード」）などをもとに学園・学校としての家庭学習への支援のありかたを各家庭に示す。
	健全	・あいさつ運動の改善、充実などを通して、あいさつの励行を行い、全校に温かい人間関係を育てる。 ・自分の健康や体力に関心をもち、それらの向上に向けた取組を自主的に行うことができる児童を育成する。

成果	課題と改善方策
学力 ・学力調査の結果から、平均正答率は全国、東京都、三鷹市の平均を上回っている。しかし、各教科、観点による分析をすると、不十分な部分が見えてくる。一人ひとりに確かな学力を身に付ける努力を怠らないようにすることが必要である。 ・学園研究で高めた問題解決過程や知的コミュニケーションの授業を他教科でも生かそうとする教員が増えてきている。 ・児童・生徒の姿にも活発に発言し、授業を活性化している姿が学園全体に多く見られる。 ・連雀「わが家の『まなび』のスタンダード」をもとに、各教科で学年に応じた家庭学習の支援を行っている。家庭学習の充実を各教科の学習指導の柱に据えた取り組みを強化している。	学力 ・今後も4校で目標を明確にして研究組織、教科等を工夫しながら学園研究を推進していく。 ・児童・生徒にとって常に「分かる」「できる」「楽しい」授業の創造に努める連雀学園であるよう意識を高めていく。 ・連雀「わが家の『まなび』のスタンダード」をさらに使いやすいものに改善し、さらに有効な支援となるよう指導する。 ・学園保護者アンケートでは家庭学習の数値は低い。保護者が子供の家庭学習について効果を実感できるよう、具体的な手だてが必要と考える。さらに取組を改善していく。
健全育成 ・一中では、教育支援校内委員会、生活指導連絡会は週一回定期的に開き、生徒指導の充実に向けた情報の共有、指導の一貫性を担保し、対応だけでなくより積極的な生活指導の充実と組織的な生徒の見守り体制の充実を図った。支援が必要な生徒への特性に配慮した共通理解に基づく指導が充実した。 ・あいさつ運動の取組は、四小では、各学級であいさつについてもめあてを定めたり、あいさつ運動への参加の仕方を改善したりすることが、六小では「プラスワン」の取組、評価の見える化等に効果がみられ、意識が高まった。南浦小では、「いじめゼロ」を目指した児童会による劇や全児童と担任との個人面談などを通して、落ち着いた学校生活が送れている。 ・体力向上の取組は、中学校では部活動を中心に実施され、小学校ではなわとび週間、持久走（マラソン）月間等を取り入れ運動の日常化を図っている。特に南浦小では、コオーディネーショントレーニングや、オリンピック・パラリンピック教育重点校としてオリンピアンを招いての授業等さまざまな取組を実施し、成果を上げている。	健全育成 ・あいさつ運動が実施されているので、あいさつに対する意識は比較的高いが、継続的に指導がないと主体的なあいさつができない傾向にある。日常的にできるようにする具体的な手だてを検討、実践していく。 ・児童・生徒の自己肯定感の実態をつかみ、高めていくことを検討する。 ・全員面接や、いじめゼロの取り組みは今後も継続しながら、さらに改善を図っていき、温かい人間関係をつくる。 ・体力テストの結果、反復横跳び、握力などが課題としてあがってきている。また、全体としても体力テストの結果は芳しくない。全国平均を上回ることを目標に、体育の授業改善及び運動の日常化が求められている。

検証項目	（５）コミュニティ・スクールの運営 ○　コミュニティ・スクール委員会の組織・運営　　○　保護者、地域住民の学校運営への参画の状況 ○　学校と保護者、地域住民との連携・交流　　○　その他
目標	・コミュニティ・スクール委員会の効率的な運営を行うと同時に、CS各部の活動を充実させる。
取組	・年間8回のCS委員会の機能を充実させ、効率的な議事の進行と協議の活性化を目指す。 ・CS広報部を中心に学園NEWSやHPなどの計画的な発行、更新を行い、発信力のある広報活動を目指す。

成果	課題と改善方策
・年間の議題一覧に基づいた計画的な議事の運営が行われ、CS委員会は毎回有意義なものとなっている。役員会において事前調整を行い議事の効率的な運営はできている。 ・連雀「わが家の『まなび』のスタンダード」をさらに改善をし、使いやすいものとした。 ・広報部の情報提供は年間計画のもとに、学園の特色ある教育活動、研究活動等がレイアウトを工夫し、タイムリーに発行ができている。広報紙でCSの活動は伝えているが、保護者には学校主催とCS主催の行事の区別ができない人もおり、CSの活動と認識されていない。何をやってるか、どんな効果があるかなどを伝え、保護者の理解について把握する必要がある。	・協議の活性化についてはまだ不十分である。また、CS活動の結果がなかなか見えてこないことが課題となっている。 ・CS全体で話し合う機ををさらにもつことが必要で、その機会を計画的に確保していく。 ・来年度、改善した連雀「わが家の『まなび』のスタンダード」をより広め、活用させ、生活習慣や家庭学習などを充実させる。 ・学園の保護者アンケートによる評価では、毎年40％前後の保護者が「わからない」と回答する。しかし、わかっている保護者からは80％以上の肯定的な回答を得ている。より改善するには、学園CSとしても努力するが、市教委の広報の力も借りたい。 ・また、学園評価のあり方についても再考する時期ではないか。検討する1年とする。

平成28年度　連雀学園の評価・検証結果のまとめ

（１）から（５）の検証結果を踏まえて	１　「小中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の取組において特によい成果が得られたこと ・学園研究第2期1年目として、4校で「創みだし、かかわり、高め合う児童・生徒の育成」という研究主題のもと、「問題解決過程における知的コミュニケーションを通して」という昨年度までの研究成果である知的コミュニケーションを活かした副主題で取り組んだ。研究内容は今日的課題であるアクティブラーニングを社会科、理科、生活科、体育科、保健体育科で、そして「特別の教科　道徳」とした。新たな課題における教科、領域で学園の児童、生徒に問題解決能力やコミュニケーション能力をつける手だてを探ることができた。またそのことを通して、児童、生徒の学力および社会力、人間力を高めようとすることができた。 ・コミュニティ・スクール委員会のサポート部の企画のもとに9月に実施した子ども熟議では「連雀学園SNSルールを考えよう」をテーマに各学校の代表者同士で熟議を行い、児童、生徒の心を豊かにする活動が充実した。 ・昨年度からの実践が引き継がれ、今年度は児童会・生徒会で、「熊本地震への募金活動」「使用済み切手回収活動」を行い、学園の自発的な取組となっている。
	２　今年度に明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること ・昨年度からの課題であった「連雀わが家の『まなび』のスタンダード」をコミュニティ・スクール委員会で来年度に向けて、改訂した。今後、家庭学習や生活習慣の確立にさらに活用を広げていくこと。 ・学園経営に直結し、児童・生徒の姿で評価ができるような評価の在り方を探っていくこと。 ・新学習指導要領に則り、学園カリキュラムの改訂をすること。特に総合的な学習の時間及びキャリア・アントレプレナーシップ教育の改訂を行う。
	３　「２」の重点課題を解決するための改善策 ・学年当初の保護者会などで十分周知していくこと。教員にも周知徹底すること。使い方の例示などしていくこと。 ・講師を招聘し、学園評価の在り方を検討し、1学期には素案を提案する。 ・市教委の動向に合わせ、学園・学校でも改訂に取り組む。